

こんな話を聞いたことがある。パリの日本企業が入っているビルだけ毎夜遅くまで明々と窓の光が街路を照らしているのだという。夕食を楽しんで帰宅するフランス人にはこのほか異様な光景となっている。それを見たあるフランス人がこう言った。「人間には3つの責任がある。一つ目は家庭人としての責任、二つ目は住民としての責任、そして3番目に職業人としての責任。あのビルで働く日本人は、3番目の職業人としての責任しか果たしていないのではないか。3番目の責任だけを果たせばよいのは兵隊と囚人だけだ」

そういえば、日本人ビジネスマンは兵隊に例えられることも多いし、同じ制服を着て、食事まで社員食堂で済ます姿は囚人のようでもある。日本では、女性が家庭を守り、住民としての責任を背負い、男性は職業を通じて社会に貢献し、生活費を稼ぐという点で家族に奉仕するという姿が一般的であったのも事実であろう。しかし、「男女共同参画社会」の実現が現在の大きな政治課題であり、女性が職業人として生きる選択肢も強調されてきている。

もちろん、私はこの方向には

大賛成なのだが、少々気になることもある。それは女性の職業人としての生き方が強調されるなかで、家庭人として、住民としての責任を果たすという考えが女性に希薄になってきており、

また、男性側でもそうした責任を果たすための理解が進まず、結果としてコミュニティの崩壊、少子化といった新たな社会問題を引き起こしているのではないかとということである。

家政学部の使命

家政学部とは、そもそも、こうした人間の3つの責任を自覚し、科学的に行動できる人間を

人間の3つの責任

家政学部被服学科
助教授

細川 幸一

育てることを目的に教育を行う学部であると私は理解している。しかし、社会が複雑化し、職業人としてのスキルが専門化・高度化するにつれて、家政学部教育も細分化してきている。本学で言えば、現在、児童学科、食物学科、住居学科、被服学科、家政経済学科の5つの学科から家政学部は構成されている。これは、「良妻賢母」より、女性が職業人として、生活の糧を得て自立するための能力の向上が大学教育に求められていることの証であろう。

しかし、家政学の意味、家政学部におかれている学科で学ぶことの意味の問いかけを今一度行う必要があるのではないかとと思う。それは単に、家政学部を生活科学部というような名称に変更し、カリキュラムをいじくるというだけではない。21世紀におけるわれわれの生活をより合理的に、より豊かに持続させるために、職業人としての能力を養い、それと同時に家庭のあり方、コミュニティのあり方を探求し、そこでの自分の責任を自覚し、それを自分の人生のなかで実践していく意思と能力を持った人間を育てることこそが家政学部の使命であろう。

